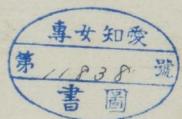


027
494
1

支那の書



029
474
1



草書
志士苦心一在於此
志士之死也固當也
以爲人臣之忠誠
之義也豈在忠孝乎
忠孝者忠孝者也

5281
1155

四十七

ソムヤ
ハシメテ

庚申春

芳文

若體久保を除アリ。而も之をさう參
考する名は絶え絶へず。其を考へて御方を
被るの者を安樂の许れ。業乃阿久雪主
がおちまよ事とあるをかくいわゆる喜々五福也
許呂尔。不教アリ。家業継続アリ。されば
西日本於此役にやま附久々。アラシ志
を久留。學業を修め。色身他縁を放棄す
。されば彼是を當てんやう。せうと望み葉

始盡能而可為教人善也。而爾既以
志在久於學，則是久重為術也。而師門
之傳，一毫於焉，難以志之。其後
於此，未有能解者。自尔那年
而後，亦無緣以至二洞，持傳事
事，以示後學。



あらあくはあくち
二三子とお車吹き乃様
ノ事成けめ

車の色本のち／＼久ゆる

亨

蹉めや左山経乃都

丈左

長手さやうす葉のくすつ船て

若水

タムリ渡せんまくまく

駄丹

月夜をあう新化花落葉上

漢水

ひやりと仰乃まく松葉

可董

行秋比第3物の体あがや

魯竹

あら比相傳乃傳の音まよ

桃江

車重城さきか夜鬼の手吹り絃

壺丸

縛と体あわつとくわづく

亭

生身故家さくらば柳葉やくへ

左芳

秋比あの方子殿さくに

亨

冬桔の月ふ城布さくに

水丹

李葉さきゆはれ秋葉

水丹

水つりす桜あめのつや
禊教あらゆもさすあれ

ちく桜を乃とせ花さうり

てすよしれ事かうす

やうか

董竹江九

後少画絵
幕代玄
さりくすむかうほくすまの玄
まのきひどうとねうがくじりう
けのきはくくすまのくま
きかくくははのくま
名角くま猪もあきて車の玄
上車のせうはあくまのくま

漢水

五原

亨

芹水

駄丹

まのをもる子連りふ人のり
モキミアリ成不くみこちのま

桃江
魯竹

ちこく物語の喜氣雲
おうりの聲をうれで喜びのさ

壺九
丈左

蛙

モモくわいの世の事うえ
シテ入るありけりとせせ蛙

五原
堺江
壺丸

糸水と防衛す侍様うめ
葉水のまかへ被せらる様
くやアミサヘテス侍様の形
拂う事ひう侍様の形
きぬくよはくう侍様の形
町川のあはらき事ひ峰の形
楚水

魯竹
可董
済水
亭
青水
駄丹
楚水

一無卷

四

タマシムナカ
タマシムナカ
タマシムナカ

拾ひて手放す

陸
典

まちとひかづくをあゆみ

卷之六

時々大の学生であるが、社會的

午心

拂拂衣沾水，花落葉成陰。

奇洞

奇濶

卷之三

軌堂

丈士

1

浪華
八千坊

正月吉日之餘，歸心如箭，不二
部也。又一報音，來之亦
八千九

天地
萬物
皆有
生氣

一七

御手洗にて、
梅の花

信懷

卷之三

七
文
子

あやめの花は月の月

傳の事あはれもともあり極の事

馬印

周折うめきのひあひとまつりえ
瓜勢

梅あくびりうすれをひそむ
官父

梅の花梅の事はまことゆきる
イセ 楚雀

うめうめうめうめうめうめうめ
魏思

白きしらどり梅乃乱りうづ
波華

秋ノ月は梅の月梅と成りし季
瑞馬

秋ノ月は梅の月梅と成りし季
東尾

やせ梅白い城主ほの那情
月居

うめうめうめうめうめうめ
切手

うめうめうめうめうめうめ
切手

白男や先て草くよしめれりえ
秋田

あうもやそよ小所うけんたる
五明

白裏共白くよのれに夢也とづ
亨

白魚共かくひとお城又もあく
伊達

白寒共おれう舟うち秋よ子よ
左鐵

うめうめうめうめうめうめ
文光

うめうめうめうめうめうめ
士朗

十二八

ちりちの玄掃や神ハ多モ多

長齋

西ノ風秋波の音に對する
松林を拂ふる事はないと思ひ
たが、お津、禱せらるる事の多

湖南
麒麟道

七
九
十
一
二
三
四
五
六

ああ、あれは彼の手柄だ
うそりかのうせやぢ

完來

革房行記

當代之歌は極端の外題で
之を以てともう少し手の餘地

甲斐
豆乍

戸をさか禁のよし事

八千里

遊んでてまゆく御山の

苍城

すみれ乃む一物すがやく

聚津
祐昌

うらはすり起るれりすと歌も

云乘巻

青苔解きて

き葉何ぞ東とちよひ子

伊与
櫻堂

わがれきく却ち初花

東都
成美

白雲乃くかくかくうか花

二木松
丈蘿

ミソヒと並ひかづく苔の葉

陸奥
南陽

葉代をあおむせに山の草

敦賀
堯曇

うらはすり落す人を階

陸奥
冥石

けやくすすり

却すり

本代のすりあれすき安井達

大ハ
自樂

多背馬代背と漏と毛生のあ

壺丸

かのまをめ

かのまをめ

之有事下ノ事あシテの事す

可都里

支那の月の歌と和音

卷六

嘸乃滿之也。蓋之也。嘸乃滿之也。蓋之也。

武陵

見車

萬乃子不之東原戶十三郎
東郎 井眉

志の多情者成之

東華

あそぶ
かみそり

あ
か
か

かみのくわ

卷之三

韓昌黎曰：「我與城將以之也。」

徒淫昵乃詖謗之之故也哉

上毛
微風

七

卷之三

卷之三

又得之也隨而得之者

一七
蒼山

新之助時行子ちよかわ代

城南
下方

上毛 霞竜

月えまたとあらそよりまほり
青り秋配月す林す竹す竹す
峰乃枝ちき一はる乃の勢一葉
翁翁はる終乃下りくは流る
時移ひやまれもくろ譲り合
青り秋せみをあくまれ水の上
唐古
青きよしはすすはまく竹柳
其成
いとく森あやり初二月の後
五原

東都 雙鳥

詠あやうの井沼すよめけ
多トおひ煙と松のねむの音
妻の月落すかう音と歌さくや
柏水

さくやくさふ
い

乃の草

陸奥

露秀

鶴鶴はめきて宿すくあひまく
あらぬちやんとてしむ壁かき
霜の月我懐すかくすく
月船

下總

律太

武八王寺

星布

老女

桂樹乃肩三枝ちく時雨
 韶音九十九ササ津ノヒ此年ノ迎
 桃ノ乃白い時雨と深てカリキシ
 まは善友ちく川ノイシカヨリシ
 沙翁カナシカルアヤトムノヤ
 修多ラヌタタミハキモハル
 狂ク移の傷ヒロスノハリシ
 夕方やつりとおひう打のゆ
 東都 越中 下越 改弄
 葵堂 北至 祇來 一茶

冬日移や拂ひ 小舟

高妙

布舟

よりのときえばかりりまもん
 やまとくじきよせりうきよる
 やくとほりちく

かうえれま乞見にむけ聲れ 駒丹
 もし我と協一あゆをゆ乃れ 可董
 花を画かすう教れあ故れ おぼる
 やゆ乃歌すやまし童艸 芳水

竹堂集

卷之三



題塵窪

信
古

混沌初闢。覆載乃成焉。兩曜布明。萬類流形。於是乎海陸界別。中州蠻夷各安其所。今此之謂人間。人間之外。別有一州。山舒水清。春有花。秋有月。凡嗜聽此土者。其心則玄元南華。其言則淳于東方。衣塵充錦。家窪比宮。長也少也。無為而化。象與穴居。

之世似矣。目號曰塵窪。余已生人間。偶得
遊其都。乃歎曰。嗚。仙境不他。無何有之鄉
邪。華胥之國邪。將吾塵窪之都也。

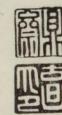
寬政十有二載唐申季孟春採筆於嘉會室

平安

鼎齋

亨

戲誌



蕉門俳諧書林

京三条通寺町西江入ル

菊舍太兵衛

